

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

吉野作造とキリスト教の影響-4-

著者	松岡 八郎
著者別名	Hachiro Matsuoka
雑誌名	東洋法学
巻	37
号	2
ページ	41-65
発行年	1994-01
URL	http://id.nii.ac.jp/1060/00003491/

吉野作造とキリスト教の影響 (4)

松岡八郎

六

海老名弾正が入学したころの同志社英学校はどのような状況であったか。

新島襄がアメリカン・ボードの援助を受けて、山本寛馬と志を同じくし、ジェローム・デイン・デヴィスの協力を得て、また参議木戸孝允の支持をも受け、種々の妨害に会いながらも、不屈の努力によって、ようやく京都に同志社英学校の開校にこぎつけたのは、明治八年（一八七五年）十一月九日のことであった。

開校当初、校舎は仮校舎であり、教師の陣容も不備であり、また生徒も僅かに八名にすぎず、すべてに不十分であったが、翌明治九年（一八七六年）九月には新校舎が落成し、海老名を始めとする熊本洋学校の卒業生たちが入学したことによって、ようやく僅かに活況を呈するにいたった。

だが洋学校の卒業生たち、すなわち熊本バンドにとつては、「当時校舎は僅か二棟で、何等設備とはなく、洋学

校より来た者と他に四五人を除けば多くは浮浪学生であつた。学校には規則もなく又一定の課程もなく、又生徒取締もなく、宛然昔の漢字塾の様な状態であつた。「其乱脈不取締は殆ど想像の外で、秩序ある洋学校の出身者は何れも驚き且失望せざるはなかつた⁽⁸⁾」。また寄宿舎の食事は「日本人の食性」を全く無視したものが給され、食物のために苦しむ者が多かつた⁽⁹⁾。

このような失望や不満は、授業内容や方法についても現われ、海老名はつぎのように、その不満を述べている。
「旧約書創世紀組に入れば、世界創造の紀元はキリスト以前何年に当ると教師(Down)は尋ねる。創造の六日は一昼夜二十四時間であつたか如何と教師と我との間に議論は始まる。毎日議論だ。教師と学生との意見は天地隔絶であつた。新島先生の四福音組に入ると、英語聖書は日本語に翻訳してある。困つた次第である。英語不案内の人々と別々に教へて貰ひたいと要求が始つた。先生も同意して、別に一組つくられた。デビス先生の詩篇組に入れば、分らない日本語で、一句々々翻訳して教へて居らるゝ。聞くに堪へない。ラーネット教授独り英語で授業して居らるゝ。久しからずして不平は続出した⁽¹⁰⁾」。すでに英語に堪能であり、ジェーンズから、聖書註解書は読むべからずと勧告され⁽¹¹⁾、また旧約聖書の説明にはしばしば「高等批評」を採用すること⁽¹²⁾を学んでいた海老名を始めとする洋学校の卒業生たちには、同志社の宣教師たちが「旧約の記事を其偽信せしめん⁽¹³⁾」とする聖書無謬説⁽¹⁴⁾を採つていたことに対して意見が隔絶していくのは当然のことであり、そこに不満が生ずるにいたる。

すでに述べたように、ジェーンズからきわめて大きな激しい感化を受けた海老名は、同志社入学当時、「單純なる信仰」ではなく、横井小楠の実学的思考と科学的合理性および歴史的思考を基底として、第一の回心にもとづく主神

主義を貴重な体験とする自由なキリスト教信仰——すなわち、後述の新神学へ傾斜していく方向性をもっていたのであり、このような方向性が同志社の授業内容や方法に対する不満を生み出すこととなったのである。

右に述べたような失望や不満が激発しようとした時、洋学校出身者たちは、当時、洋学校を退職して、大阪外国語学校に勤めていたジェーンズに相談したところ、かれは京都へ来て、「同志社は創業時代であるから、学則の如きは如何にも改善する事が出来る、其他塾則の如きも新たに組織するを得るを以て、創業の任を盡くすべし」と説諭したので、かれらは落ち着きを取り戻し、同志社に止まることになった。こうして学則や塾則の改正が洋学校卒業の生徒たちⅡ熊本バンドⅡの側から提案され、新島校長もほぼこれを受け入れて、ここに同志社の学校としての体裁が整備されたが、これ以後、熊本バンドが同志社における生徒の有力な勢力⁽¹⁶⁾となっていた。

だが海老名は日常の課業にはなかなか熱心になれず、みずから神学の研究に努めて、知識の吸収に励み、生徒仲間とは常に神学論争を行い、デヴィスをして、「君等（熊本バンド——筆者注）は何ぞ思考するの甚だしき、米国の学生は考へない。純にして教授の言を論争なく受け容るゝよ」と嘆かせたのであった。このように海老名は「神学研究に心酔して」いたが、ジェーンズからは「君は過てり、それは、宗派を作る本である、断じてやめよ、神の国は力である、智恵ではない。君は天路歷程中の多辯者を学ぶのである。汝は岐路に入れり、以後神学書は読むべからず」と激しく助言されて、大いに考えさせられた。

こうして海老名は同志社入学後、種々な不満をもってはいたが、そのまま学業を継続していき、さらにやがて伝道活動に入っていくことになる。すでに述べたように、新島校長の依頼を受けて、夏期休暇中の明治一〇年（一八七七

年)七月半ばより八月半ばにかけて、また翌明治十一年(一八七八年)には休学して二月より七月にかけて、二回にわたって群馬県安中地方に伝道活動⁽²⁰⁾を行い、そのきわめて熱心な努力によって大成功を収めることができた。だがその結果、身体を酷使して健康を非常にそこない、心身ともに疲労し、とりわけ眼が衰弱して、読書が不可能となり、その秋(明治十一年へ一八七八年)——筆者注)からの学業に耐えなくなつた。日々の学課については浮田和民が親切にも音読してくれるのを毎夜聞き、課業はなんとか中止しなくてもよかったが、したがって無聊の時間が多く、散歩と瞑想とに時間を費やし、「快々として楽しむこと能はず、そこで私はその快鬱の由つて来る所をたしかに衝き留めようと深く思慮を重ね、瞑想から瞑想に耽つたのである」⁽²¹⁾。この徹底した瞑想の結果、同年晩秋、第二の回心を体験するにいたつた。⁽²²⁾

この回心において、「私は神の与へ給はざるものを取らんと熱中する天地の泥棒、大罪人である。さらば、私は罪惡の土塊であつて、果して何も取るべきもの、神の聖旨に合するものは何もないだろうか。否ある、私の胸奥には尚神を愛慕する一片の至情がある。この至情には罪はない。さらば今後、私はこの一片の至情に生きよう。権力の欲をも、知識の欲をも、布教の欲望をも、盡忠の奉公をも十字架に釘付にして、私は唯神を思ふ一片の至情に生きよう。この至情だけは神の思召に適するに相違なし」⁽²³⁾と結論したのである。こうして、前述の第一の回心における神を主君として仰ぎ、その忠僕として生きようとした決心を改めて、すべての欲望特に貪智の欲を断滅して、神を慈父として愛し、神によりそう無力な一赤子とならんと祈り、ここにいわゆる「神子の意識の宗教」に目覺め、その根底を作り上げた。

だが、「憂鬱が忽ち變じて喜樂とはならない、この赤子は円満肥へふとった赤子ではない、長い病苦になやんだ小児が、正しく、九死に一生を得て、快復期に入ったといふばかりの状態であつた。私（海老名——筆者注）の問題は、如何にして此逆境を有益に通過すべきかである。名譽の欲、權力の欲、知識の欲は忽焉として消え失せたのではないが、最早、主として我が求むる所ではないから、強ひて之を打拂ふにも及ばない、私は専ら精神を潔くすることに心懸けて、前々年（明治九年へ一八七六年——筆者注）、デューンス先生が、私に勸言した事が、こゝに始めて実行の道となつた。私は神学研究を全然放棄せねばならないやうに、余儀無くせられたので、偏に、神の赤子の生育に心を注いだ」⁽²⁴⁾のである。

このように海老名は、第二の回心を貴重な体験として、終生、「神子の意識の宗教」をその信仰の基礎に置き、心の平安を得たのである。やがて明治一二年（一八七九年）六月には同志社神学校を卒業し、同年の晩秋には、すでに伝道に従事したことのある群馬縣安中に牧師として赴任し、この上州伝道は約七年間続いた。

当初、この伝道活動においては、以前からの眼病ということもあつて、あたかも行者あるいは世棄人のように、諸欲を断滅すべく消極的生活を行い、こうしたすべての欲を棄て去らうとする内觀の修養によつて、ただ神によりそう赤子が育成できるものと考え、そのことに努め、成功しつつあると思つていた時、この諸欲を棄て去ることを強行することは、他に対しては傲慢となることに気付き、この傲慢という罪をも棄て去らねばならないと自覺するにいたり、このことにも心掛けた結果、⁽²⁵⁾「我は悲觀の境より脱離して楽觀の境涯に入り始めたのである、我が消極的生活は、一變して積極的生活となつた」。

こうして海老名は、諸欲を矯めることによって神の赤子たろうとする消極的生活より、神の導きにしがたがつて積極的樂觀的生活に転じ、眼病も次第に回復して、胸中もおだやかに晴れやかとなつていき、神を愛慕する赤子の育成に努めたのである。このような内観によつて形成された海老名の積極的な樂觀的な「神子の意識の宗教」こそ、後に述べるように、後年、吉野作造の肯定的樂天的人生観²⁶に多大の影響を及ぼし、この人生観がその民本主義の政治理論を生み出す基礎をなしたものであると思われる。

このようにみずからの体験と内観にもとづく独自の「神子の意識の宗教」の育成に努めていた海老名は、この上州伝道の間に、明治一四年（一八八一年）一月一二日には父が死去して、不孝の子であつたと慨嘆したが、翌一五年（一八八二年）一〇月三日には横井小楠の長女ミヤと結婚し、終生の好伴侶を得たのである。その後、上州伝道はさらに活発化していき、明治一七年（一八八四年）には安中より県庁所在地前橋に移り、教会を設立して、そこでの伝道がようやく本格化したとした時、明治一九年（一八八六年）四月京都で開かれた日本基督教伝道会社の年会において、日本組合基督教会の設立が決定されるとともに、大いに伝道の戦線拡大を計ろうとして、牧師の大幅な異動が決定され、この結果、海老名は東京へ移ることとなり、約七年間にわたる上州伝道は終わった。同年一〇月にはなんの準備もなく、初めての東京伝道を開始し、学生の多い本郷湯島に講義所（これが後の本郷教会の揺籃である）を設けて、その成果がようやく挙がろうとしていたころ、横井時雄（横井小楠の長男、妻ミヤの兄）の不幸な家庭事情があつて、海老名は東京を横井に譲り、交代してみずから熊本に赴任することを決意し、明治二〇年（一八八七年）七月には熊本へ移った。このようにして熊本伝道が始まり、それは前述のように大成功であり、いまや牧師として押しも

押されもせぬ存在となった。だが明治二十三年（一八九〇年）一〇月には熊本を辞し、日本基督教伝道会社社長に就任して京都に移り、全国的な伝道の責任者として熱心に活動したが、明治二十六年（一八九三年）の社長の改選に当たって落選した。同年八月にはかねて招聘を受けていた神戸教会の牧師となり、その教会の再建に努力して成功したが、明治三〇年（一八九七年）五月にはみずから辞表を提出して、教勢の振わない東京において、大いに伝道活動をすべく、神戸を去り、同年一〇月には上京し、やがて本郷教会を拠点として、多彩な活動を展開していくことになり、後述するように、やがて吉野作造と直接接触して、多大の影響を与えることになる。

それでは、右に述べてきたように、同志社卒業後、明治一二年（一八七九年）からの上州伝道より明治三〇年（一八九七年）の上京にいたるまでの約一八年間において、海老名のキリスト教信仰および思想はどのような変遷を遂げていったのであろうか。

すでに述べたように、同志社時代における第二の回心から上州伝道の初めごろまでにおいては、海老名自身の独自の体験と内観にもとづく、積極的な樂觀的な「神子の意識の宗教」を形成し、その後、その赤子の育成に努めていたのであるが、明治二〇年（一八八七年）よりの熊本伝道の開始ごろから、明治三〇年（一八九七年）神戸教会を辞して上京するまでにいたる約一〇年間においては、次の三つの問題がその間の信仰および思想に影響を及ぼしたのではないかと思われる。それは、前述のように、第一には海老名の新神学への傾斜の問題であり、第二にはその日本神道研究の問題であり、第三には海老名の日清戦争に対する態度の問題である。

まず第一の問題から考察すれば、日本に新神学がもたらされた最初は、独逸普及福音協会の宣教師スピナーが明

治一八年（一八八五年）九月——海老名の上州伝道の終わりに近いころ——に来日して伝道を開始してからのことであるが、それでは、欧米から入ってきた新神学（自由神学）とはどのようなものであったか。「ひとくちに『新神学』といっても、それはかならずしも一定の教派教会の神学をさすわけではなく、その輪郭も内質も漠然としていてはつきりしない⁽²⁷⁾」と言われており、ここで、その詳細について述べることは到底できないが、だが、その代表的なものは、前述のように、独逸普及福音協会、ユニテリアン協会、ユニバーサリスト（宇宙神教）の三者であり、これらの三者は、「それぞれ多少の差異があるものの、いわゆる聖書の歴史的批評（高等批評——筆者注）という立場に共通性がみられ、それが『自由キリスト教』の名を『保守』的キリスト教に対してもつゆえんである⁽²⁸⁾」とされている。

この「ドイツから聖書の高等批評を基礎とする、いわゆる新神学が導入されて、教会的伝統と神学的素養を持たなかった日本のキリスト教会は、一大動揺を受けるに至ったのである。十九年頃から、『ユニテリアン』及び『ユニヴァーサリスト』の信仰が日本に伝えられたが、それは必ずしも未だ教会の信仰を動揺させるものではなかった。それはいわば哲学の一種であり、反福音主義的哲学と戦うことはキリスト教徒の年来の課題であったからである。しかしながら『チュービンゲン学派』を代表する『普及福音教会』の神学に対しては、当年のキリスト教徒およびその指導者たちは自らの信仰を守りうる盾を持たなかったのである。小崎弘道がその影響を受けて、明治二十三年、はじめて『聖書のインスピレーション』を論じた時には、未だこれに賛意を表する者は多くなかったが、その後急速に支持者を獲得して行き、二十四年六月には金森通倫が、『日本現今之基督教並ニ将来之基督教』と題する小冊子を著して、大胆に高等批評を承認し、正統派信仰を攻撃するに至った。このような状況の中で、キリスト教会の指導者たちは漸

進急進の差はあれ、ほとんどすべて新神学に同情を示した⁽²⁹⁾のである。殊に日本組合基督教会への影響はきわめて深刻であり、やがて後には金森通倫や横井時雄らはキリスト教界から出てしまうことになる⁽³⁰⁾。

海老名はどうであつたか。すでに述べたように、小崎や金森らと同様に、熊本洋学校においてジェーンズから自由なキリスト教の感化を受けて以来、「單純なる信仰」ではなく、聖書の高等批評を行い、独自の体験と内観にもとづき、積極的にして樂觀的な「神子の意識の宗教」を形成しており、いわば、もともと新神学へ傾斜していく方向性を有していたのであり、そこへ新神学が入来したことによって、その傾向が現われてくることになるのは当然であつた。海老名は当時、ドイツの新神学の代表者プライデレル (Pfleiderer) の著書「宗教哲学」(Religionsphilosophie) を⁽³¹⁾讀んだ時、ちょうど自分の自叙伝を読むような感じがしたと述べているように、新神学に同感⁽³²⁾を示してはいたが、しかし海老名と新神学との関係は微妙であつた。海老名自身、後年、「ユニテリアン、自由神学と称せられる人々、これらの人々とは、智識の上に於て殆んど一致することが出来る。が情感、宗教的・実験、倫理的意志の点に至つて、どうしても一致になり難きものがある。筆に、口に、盛に自由神学を主張せし人にして、今日は自由神学没基督教などの論を唱ふるものもある。これかれらは己に初めより宗教的・実験がないのだ⁽³³⁾」と述べて、自己の宗教と新神学の立場の相違を表明しているところから見れば、知識としては新神学への傾斜を示しつつも、宗教体験を非常に重視し、その独自の体験にもとづく「神子の意識の宗教」をきわめて貴重なものとして、キリスト教の基本を考えようとしていたのであり、このような考え方にもとづいて、明治二十四年(一八九一年)および同二五年(一八九二年)のころ、「六合雜誌」にキリスト論や贖罪論に関する論文をいくつか寄稿しており、これらは明らかに新神学への傾斜を見せ

ながら、その宗教体験に根ざす「神子の意識の宗教」をキリスト教の根本として、これをキリストの存在において追究する努力を熱心に行っている。⁽³⁴⁾

このように海老名は、新神学に傾斜しながらも新神学に没入することはなく、したがって金森や横井らとは異なつて、キリスト教界を離れることはなく、その独自の体験を貴重とするキリスト教を把持したのであるが、さらにその洋学校以来の科学的合理性や歴史的思考よりする思想の弾力性と柔軟性によつて、また明治二〇年代に入つてからの国家主義や国粹主義の台頭という時代思潮⁽³⁵⁾に対応するためにも、日本神道の研究に努めようとするにいたり、ここに第二の問題が起こってくる。

海老名が日本神道の研究を始めたのは、熊本において牧会伝道に従つていたころからであつたが、それに京都での日本基督教伝道会社社長時代、さらに続く神戸における牧会伝道の時代にも継続され、この神戸時代にその成果が顕著に現われたのである。いまその詳細⁽³⁷⁾について説明することは到底できないが、ここでは、海老名の日本神道研究がそのキリスト教思想との関係においてどのような意義をもっているかを主要な関心として述べてみたい。

そこで、日本神道を研究したこともあつて、海老名のキリスト教をよく日本的キリスト教と呼称されることがあるが、海老名自身はつぎのように述べている。「基督曰く『神は靈なれば拝する者もまた靈と眞とを以て之を拝すべし』と、此の点に於て日本人は未だ幼稚である。国民的見地を破りて世界的見解に入らねばならぬ。日本人には殊に是が必要である。彼の佛教の如き宇宙教すらも、日本に入りてよりは、地方的着色を帯び来つた。或る人は基督教が日本的に成らねばならぬと言ふ、甚だ浅墓なる考と謂はねばならぬ。基督教は到底日本的に成り了る程小さいものではな

い。基督教は既に民族的境域を超越して居る、断じて日本的たらしめ得べきものではない、基督教は日本よりも大なる歴史を有し、更らに深く更に遠き淵源を有して居る⁽³⁸⁾。

右の文章に明らかなように、海老名は日本的キリスト教という考え方に賛成ではなかったと言うことができるが、その研究を見る時、確かに日本神道をキリスト教と結び付けようと努めていたことも否定することはできないと思われる。

海老名は「日本国民は古来敬神の国民である⁽³⁹⁾」と言い、したがって海老名が在来宗教としてもっとも重視するのは神道であり、その特性は一神教的傾向⁽⁴⁰⁾であり、その一神教的傾向は神道に本来備わっているものであるが、本居宣長や平田篤胤が「天津神・天御中主神」の特殊な役割や位置に注目したことにより、より一層明らかとなった⁽⁴¹⁾と言う。

また、この本居や平田の一神教的傾向は、外来文化とりわけ儒教の影響（天・道の観念）によるところが多いとされるが、本居や平田はその儒教の影響をできるだけ排除することに努めて、一神教的傾向をもつのが神道の根本義であると結論して、海老名はつぎのように述べている。「敬神の道は日本の原始宗教の一大要素であつて、儒佛の渡来以前、実に有史以前より存在したものである。儒佛二教の感化を受けざりし太古に於て神道は何程の光明を有して居ったかは、今茲に論ずるを要しない。徳川時代の神道は既に儒教の影響を受けて居ったことは多大である。又儒教の哲学を取り入れて居ったことも甚大である。本居平田の古神道の如くは、古事記日本紀に溯つて儒佛の影響を排ひ除いて、純日本宗教を打立てやうと試みたなれども、その所謂神道なるものは原始神道とは成り得なかつたのである。何となれば、本居平田の両先生は最早原始人ではない、儒教の宗教又哲学にて育て上げられた近代人である、平田先生

の如きは基督教をすら研究し、基督教神学をすら一通辨へて居った博学多識の人であつた。彼等は儒佛の思想を脱却して、神道の真髓を発見し、平田先生の如きは神道が乃ち根本義を有するものにて、儒佛の如きはこの根本の横なまりと論断して居るのである。その根本義といふは天地萬有の造物者（天津神・天御中主神Ⅱ一神教的傾向——筆者注）であつて、この造物者を尊敬することが乃ち敬神の大義と結論している。⁽⁴²⁾

このように本居・平田の説くところを考えると、「我々（キリスト教徒海老名——筆者注）から見れば本居平田の二先生はユダヤの豫言者の大役を務め、敬神の大義を明にした人々といひたい、又ギリシヤの哲学者の如き使命を有したる人々であつて、神の本体を明確にせんと努力したものといひたいのである。基督教はこの天地萬有の造物者たる独一神を絶対者として尊崇し、本居平田の二先生より百尺竿頭に一步を進め八百萬神を排除したのである。故に基督教は本居平田の大改革を徹底せしむるものといふべきであらう。基督教は日本古神道の敬神に接木したいふよりも、寧ろこの敬神の道を徹底的に遂行するものであると論断する方がよからうと思ふ。⁽⁴³⁾」。

こうして海老名は、神道もキリスト教ともに一神教的傾向をもつてはいるが、單純にキリスト教の神は神道の天津神にあたるといった類比的統合を目ざしていたのではなく、⁽⁴⁴⁾「祖先教」的神道の「世界的雄大の宗教」への脱皮を試み、その路線上に普遍的キリスト教との統合も考えていたと言ふことができる。したがって、つぎのように述べている。「免角基督教を以て輸入物のやうに考ふるのであるが、日本人の心底深く体験する所の基督教は輸入物ではない。礼拝式や教義や又聖書は輸入物に相違ない、けれども敬神の嚴肅なる感情、敬神の純良なる意志、又敬神の明なる直覚は日本国民の至誠より自発する者であつて、外部より附け加へ得らるべきものではない、物品は外部より輸入する

ことを得、又科学的知識も外部より輸入することを得、然れども發明は我より生ずるものである、発見も我れ自から為すべきものである、学説は外国より輸入することを得る、然れども智覚と感情と意志とは、我れそのものが自得すべきものであつて、外部から強制的に與へ得べきものではない、宗教そのものは自発的のものである、自得すべきものである、故に活ける宗教としての日本の基督教は、日本に發生したる生へぬきであつてつけやきばではない、我々は日本国民とこの生へぬきの基督教とを論ぜんと欲するのである⁽⁴⁶⁾。このように日本のキリスト教は、日本の神道に接木したと言うよりも、その敬神の道を徹底的に遂行したものであり、神道はキリスト教においてのみ、誠の生命的發展を遂げるものであると主張している。

こうして、「神子の意識の宗教」という体験を貴重としながら、新神学に傾斜していた海老名の日本神道研究は、日本的キリスト教を主張せんがために行われたのではなく、神道の普遍的キリスト教との統合を考えたのであり、さらにこのことは当時の国家主義や国粹主義の台頭という時代思想に対応する一つの努力⁽⁴⁶⁾でもあったと見るべきではないかと思う。そして海老名のその対応が具体的な問題として現われたのが、第三の問題としての日清戦争に対するその態度の問題であつたのである。

君主主権主義を基本原理とする明治憲法が發布されたのは、明治二年（一八八九年）二月一日、すなわち海老名の熊本在任中のことであり、臣民の道德として忠君愛国を根本規範とする教育勅語が渙発されたのは、日本基督教伝道会社社長に就任した明治三年（一八九〇年）一〇月のことであったが、翌二四年（一八九一年）一月九日には第一高等学校における教育勅語の奉読式での敬礼をめぐつて、内村鑑三のいわゆる「不敬事件」⁽⁴⁷⁾が起り、やがてキリ

スト教徒によるこの事件は全国に喧伝され、事件は拡大して、キリスト教と日本の国体の問題へと進展していった。だがそれも次第に鎮静化していくかに見えたが、保守的思想の持主として知られていた帝国大学文科大学教授（当時、「比較宗教及東洋哲学」担当）井上哲次郎による「宗教と教育との関係につき井上哲次郎の談話」⁽⁴⁸⁾が明治二五年（一八九二年）一月五日発行の雑誌「教育時論」に掲載されたことによって、「教育と宗教（キリスト教）の衝突」論争が巻き起こるにいたった。井上たちの国家主義者やそれに追隨する仏教徒たちの主張は、キリスト教信仰は神への服従を第一とするために、忠孝の教えに反するのみならず、国家主義にもとづく秩序維持にも反するとして、キリスト教を猛烈に非難したのに対して、内村のみならずキリスト教徒たちは、神に忠誠を尽すものとして、いかに国家に仕えるかという問題に答えねばならなくなったが、この対処法はほぼつぎの三つに分類することができる。第一は、内村事件をもって不敬とみなすもの、第二は、国家主義の宗教性に対して否と断言するもの、第三は、この双方の中間に位置するものである。⁽⁴⁹⁾ここで詳細について説明することはできないが、日本組合基督教会の横井・金森たちは第三の立場に立ち、「天皇は我國の至尊吾人が主君なり。されば其至尊を代表する真影に対して敬礼を施し若くは天皇の御先祖に対して敬礼をなすは毫頭宗教的分子を含むにあらず。只君臣の義より生ずる外形の礼式なれば敬礼をなすに於て吾人基督信徒が信仰上若くは主義上に於て何の妨害かあらん」⁽⁵¹⁾と主張して、影像や宸書礼拜を認めたが、宗教的礼拜は拒否すべきであるとしたのである。

海老名はこの論争にどのような態度を採ったか。この論争に直接には関与することはなかったが、それに対する基本的姿勢は「もっぱら時代の挑戦を受身にとり、日本の精神的伝統を再評価し、キリスト教を矛盾なくその中に位置

づけることであつた⁽⁵²⁾。海老名がこの論争を多少意識して書いたと言われている、明治二十七年（一八九四年）五月に發表された「忠君愛国と博愛⁽⁵³⁾」という論文は、このことを明確に示している。

海老名のこの論文における論理の進め方は歴史主義であり、「人生は開發進化するものなり」として、忠君、愛国、博愛も順を追つて發達するものであると述べて、日本の忠君愛国の發達を觀察すれば、最初は忠君のみであつたが、やがて愛国心が生まれ、明治維新以後には忠君愛国の公義が成立したと考えられる。だが近年にいたつて、キリスト教が主旨とする博愛と教育勅語の根本規範である忠君愛国とが矛盾するという、前述の「教育と宗教の衝突」論争が起こるにいたつたが、キリスト教の奥義を論究すれば、そのような衝突矛盾は起こらないのではないかと海老名は主張する。海老名によれば、旧約聖書はもっぱら政治的忠君愛国を教えたが、新約聖書はその政治的忠君愛国より宗教的忠君愛国、すなわち普遍的な神の国への愛^{II}博愛へと進化したとし、この旧約聖書から新約聖書への發展から類推して、日本の国家主義的倫理としての政治的忠君愛国を普遍的方向としての博愛（宗教的忠君愛国）に包括しようとするのである。「博愛は最高尚なる宇内の大道なり世界萬国到底此大道に支配せられざる可らず然して今日は既に忠君愛国の感情を發達し来りたれば更に一步を進めて博愛を大目的として忠君愛国の目的を達すべきにあらずや」したがって「畢竟日本国民をもて其博愛の大精神を世界に施行するを勤むる」ようにしなければならぬとし、「日本帝国の臣民たる者は教育の如何を言はず宗派の何たるを論ぜず政党の孰れを問はず博愛以て宇内人類の幸福を増進するの大志望を立て以て忠君愛国の実を挙げずして可ならんや」と述べ、さらに「夫忠君愛国は邦家の大道なり誰れか之を疑はん博愛仁義は人間世界の大道なり誰れか亦之を疑はん忠君愛国と博愛とは等しく人間の大道なれば豈に衝突する

の理あらんや」⁽⁵⁴⁾と主張して、忠君愛国の臣民倫理が博愛の倫理とともに人間の大道として等質的にとらえられ、博愛という普遍的精神を日本の精神的伝統、その歴史的発展としての忠君愛国と結合したのであった。⁽⁵⁵⁾このように、「教育と宗教の衝突」論争に対する海老名の主張は、結論的に言えば、教育勅語の根本規範としての忠君愛国とキリスト教の信仰とは矛盾するものではないことであり、このような主張は、やがて勃発する日清戦争に対するその態度に明瞭に現われてくることになる。

明治二十七年（一八九四年）八月、日清戦争が起るにいたったが、この戦争に対して、キリスト教徒のほとんどが肯定的態度を採り、内村鑑三もこれを「義戦」として賛成した。⁽⁵⁷⁾当時、海老名は神戸教会の牧師として、前述のように大いに牧会活動に従事していたが、この戦争が勃発すると、これを「正義に根ざすもの」と唱道して、神戸教会を挙げて、この戦争に協力するための国民後援会に参加し、海老名自身、全国各地を遊説し、「国論を起し、国民の後援を振はしむ」るために、非常な努力をしたのであった。⁽⁵⁸⁾

このような戦争支持の態度を採った一番根底的な根拠としては、恐らく、海老名がすでに述べたように、生まれながらの武士の出身であり、したがって武士道や儒教的教養をもっていたことによるナショナルイズムがその基本であると思われるが、さらに、前述のように、戦争を支持し協力することが、すなわち忠君愛国の倫理がキリスト教の倫理に包括されると考え、ならん両者の間には矛盾することはないと思惟したことによると言ってもよい。このような思考にもとづいて、戦争に賛成し協力して、戦争はやがて日本の勝利となり、講和条約が結ばれたのであるが、この講和直後の明治二十八年（一八九五年）五月二日には「中原に鹿を追ふ」⁽⁵⁹⁾と題する演説を行った。この演説の主題は、日清

戦争勝利後の日本キリスト教の中国大陸進出における役割について述べているが、その主張は「日本国民豈に独り政治商業界に於てのみ鹿を中原（中国——筆者注）に逐ふものならんや。宗教界に於ては、実に好便利を有する者なり。天の与ふる此の好便利を有しながら、焉ぞ宗教に冷々淡々たるの理あらんや。日本国民は宜しく宗教の一大問題を解し、世界の宗教を率ゐらずして可ならんや。日本国民深く其の天職を覚悟せば、中原の鹿は日本国民の有とならん」と唱えて、佛教、儒教、神道を包括することのできる日本のキリスト教こそが中国のみならず世界の宗教を指導していくことができるのではないかと説き、その意気は盛んであり、日清戦争後のナショナリズムの高揚を示したのである。

以上、明治二〇年（一八八七年）の熊本伝道開始ごろから、明治三〇年（一八九七年）の神戸教会の辞任から上京にいたる、約一〇年間に、海老名のキリスト教信仰および思想に影響を及ぼした三つの問題、すなわち、第一の問題としての新神学への傾斜、第二の問題としての日本神道の研究、第三の問題としての日清戦争に対する態度の問題、について考察してきたのであるが、これらの問題が海老名のキリスト教に影響を及ぼし、その結果、そのころの信仰および思想を基本的に示すものとしては、明治二八年（一八九五年）一〇月二四日に決議発表された「奈良大会宣言書」⁽⁶¹⁾にこれを見ることができないかと思われる。

当時、海老名は神戸教会牧師として押しも押されもせぬ地位を占め、日本組合基督教会の中心的存在の一人と目されていたが、日清戦争後の国家主義、国粹主義がきわめて盛んとなる状況のもとで、一般的には教勢がきわめて不振となり、また新神学の影響を受けて、特に組合教会は動揺しており、したがってなんとか教勢の打開をはかり、組合教会に確乎とした方向性を与え、またそれに属する全牧師の精神的結合を新たにするため、海老名、宮川經輝らが幹

旋して開催されたのが奈良大会であったが、その宣言書は海老名、宮川によつて共同起草されたものである。だが、その宣言書を書く思想をみると、海老名の当時の個性的思想が基本的⁽⁶²⁾にじみ出ていると言われている。

第一に、その宣言書における「人は皆神の子」という表現は、すでに述べたように、海老名のキリスト教信仰の一番基底にあり、その貴重な体験にもとづく「神子の意識の宗教」を明確に示しているが、この宣言書はこの信仰によつて貫かれている。

第二に、「国家を振興し、人類の幸福を増進すべき事」という表現には、前述の「忠君愛国と博愛」という論文において、教育勅語の根本規範である「忠君愛国」とキリスト教の普遍的精神である「博愛」とが包括されるものであると主張したように、国家の振興と人類の幸福とは相矛盾することなく、両者は調和的に結合できるものであると宣言されている。

特に右のような二点が、この宣言書ににじみ出ている海老名の個性的思想と云うことができるが、このような基本的な信仰および思想をもつて、明治三〇年（一八九七年）五月には神戸教会に辞表を提出し、教勢不振が殊に著しい首都・東京をみずから選んだ伝道地として、同年一〇月には上京し、横井時雄から受け継いだ本郷教会を本拠として伝道活動を展開するにいたる。そしてやがて、明治三三年（一九〇〇年）九月、東京帝国大学法科大学政治学科に入學してくる吉野作造と直接的に接触し、吉野にきわめて大きな影響を及ぼすことになる。

(1) 一八七四年(明治七年)六月二日、新島はアンドウヴァー神学校専科の課程を卒業し、同年九月二十四日にはボストンのマウントバーノン教会で按手礼を受け、牧師の資格を得て、いよいよ帰国を間近かに控えていたが、同年一〇月九日からバートン州ラットランドでアメリカン・ボード(米国海外伝道協会)海外伝道部第六五回大会が開かれ、その最終日において、日本に真正の文化を興隆するために一大学を設立したいという演説を行い、聴衆がこれに感動して、直ちに五千余ドルの献金が集まり、この献金が同志社設立の資金となった。森中章光「新島襄先生の生涯」(不二出版) 海外修学篇 三七―三八三頁 参照およびゼー・デー・デビス 「新島襄先生伝」(警醒社書店)(大空社復刻版) 一三二―一三七頁 参照。だが、新島のこの大学設立の意図とアメリカン・ボードの意見との間には大きな相違があった。明治八年(一八七五年)三月の新島の書簡には、つぎのようにある。「私は伝道師養成の学校以外に、所謂大学程度の学校を設立するに非ずば、吾等の事業の隆盛を期することは覚束ない、と固く信ずるものであります。私が昨年伝道協会の年次大会に於て訴へたのは、即ち此の学校のことであります。然るに、伝道協会では、教役者を養成する神学校のみに、かの資金を使用せんと考へて居るやうです。若し伝道協会が日本青年の智的渴望を満足せしむるためには、如何なるものでも教授するといふのであるなれば、それに対して、私は勿論同意致しますが、唯単に神学や聖書だけを教授するものであるとせば、恐らく最優秀なる日本青年は、吾等のもとに留ることを肯じないであらう、と私は懸念するものです。何となれば、彼等青年は、近代学術に対する知識を要求して居るからであります」。森中章光 前掲 教育報国篇 三二―四頁 参照。

(2) 山本覚馬については、森中章光 前掲 教育報国篇 四〇―六頁 参照。当時、京都府顧問であった山本は新島の事業に賛同し、その所有である土地を校地として提供し、同志社という校名も山本が選んだものであるといわれている。新島と山本とが結び、共に志を同じくして学校経営に当たろうと意気投合したのである。森中章光 前掲 教育報国篇 五二―五頁および七九頁 参照。またなお山本については、吉村康「心眼の人山本覚馬」(恒文社) 参照。

(3) 森中章光 前掲 教育報国篇 四六―五三頁 参照。

(4) 森中章光 前掲 教育報国篇 六三―四頁 および 六九―七〇頁 参照。

(5) 殊に僧侶佛教徒の邪教排撃運動は猛烈をきわめた。森中章光 前掲 教育報国篇 七三―四頁 参照およびゼー・デー・

デビス 前掲 一五六―七頁 参照。

(6) 森中章光 前掲 教育報国篇 七九―八二頁 参照およびゼー・デー・デビス 前掲 一五八―九頁 参照。

(7) このとき入学したのは、海老名弾正以下一八名、一足先に入学していた金森通倫、遅れて入学した小崎弘道、山崎為徳を加えると二一名が入学した。後にさらに横井時雄が入学した。高道基 「熊本バンドと初期同志社」 同志社大学人文科学研究所編 「熊本バンド研究」(みすず書房) 所収 一三四―五頁 参照。

(8) 小崎弘道 「七十年の回顧」(警醒社書店)(大空社復刻版) 三八頁 参照。徳富蘇峰もつぎのように述べている。「予は別段新島先生には失望しなかったが、同志社には失望した。同志社は明治八年に開校したといふことで、創立から既に一年を経てゐるが、何事にも不整頓であつた。予等が熊本にて学んだる洋学校に比ぶれば、とても比較にはならなかつた」。徳富猪一郎 「蘇峰自伝」(中央公論社) 七九頁 参照。また「当時同志社は同志社トレーニング・スクールと宣教師等は稱してをり、新島先生と山本寛馬氏とが結社して創つたと云ふが、それは表向き日本政府に対する申訳で、その実は米国宣教師の全権の下にあつたといふも差支へなかつた」。徳富猪一郎 前掲 七九頁 参照。

(9) 小崎弘道 前掲 三九頁 参照および徳富猪一郎 前掲 七九―八〇頁 参照。

(10) 渡瀬常吉 「海老名弾正先生」(龍吟社) 一三三頁 参照。

(11) 渡瀬常吉 前掲 一三〇頁 参照。

(12) 小崎弘道 前掲 三四頁 参照。

(13) 小 弘道 前掲 四四頁 参照。

(14) 小崎弘道 前掲 四四頁 参照。たとえば、「系統神学の教師デビス博士は、初めは寛大なる意見を持ち、進歩主義の様に見えたが、生徒の批評愈猛烈を加ふるに従ひ漸次硬化し、遂に聖書無謬説を唱ふるに至り聖書を批評する杯とは以ての外の不敬と云ふ様になった」。

(15) 渡瀬常吉 前掲 一三四頁 参照。

(16) 「予(徳富蘇峰——筆者注)の同志社に赴いた時(明治九年へ一八七六年)十一月——筆者注)には、既に所謂の熊本バ

- ンドと稱する、洋学校の廃校と共に移転し來った連中が沢山同志社に來つて、殆ど従来の同志社生を圧倒してゐた。彼等の為に風采も言語も半ば以上熊本化してゐた。予等は京都に居て、京都言葉を使ふ必要を感じなかつた。在校の上方及び他地方の人も、余りに熊本バンドが有力なる為、熊本流の訛を模倣する程に至つた。若し予が熊本人でなかつたならば、さぞ憤慨したであらうが、熊本人であつた為に、その点丈は別に憤慨心は起らなかつた。徳富猪一郎 前掲 八〇—一頁 参照。
- (17) 渡瀬常吉 前掲 一三六—七頁 参照。
- (18) 渡瀬常吉 前掲 一三八頁 参照。
- (19) 渡瀬常吉 前掲 一三九—一四〇頁 参照。
- (20) 渡瀬常吉 前掲 一四一—一五頁 および 一四七—九頁 参照。
- (21) 渡瀬常吉 前掲 一五〇—一頁 参照。
- (22) この第二の回心の詳細については、渡瀬常吉 前掲 一五一—三頁 参照。
- (23) 渡瀬常吉 前掲 一五三頁 参照。
- (24) 渡瀬常吉 前掲 一五四頁 参照。ジェーンズの勸言については、渡瀬常吉 前掲 一三九頁 参照。
- (25) 吉馴明子 「海老名弾正の政治思想」(東京大学出版会) 二六頁 参照。
- (26) 吉野は、「吾々は總ての人類を神の子として總ての人類に一個の神聖を認め、固く基督に結んでゐる」。(吉野作造「デモクラシーと基督教」へ「新人」大正八年へ一九一九年三月号) 松尾尊允編集「吉野作造集」 「近代日本思想大系」 筑摩書房 二〇八頁 参照。)と述べて、海老名の「神子の意識の宗教」を受け継いでおり、この信仰に基づいて、すべての人間の内に神を認め、それゆえ、すべての人間を平等に信する肯定的人間觀がその人生觀の根底にあり、この人間觀を根底として、人生への限りないオプティミズム 樂天的人生觀が形成されたのであり、「自分としては基督教によつてすべての人を同胞同類と見るの氣分に深く込み込まれて居ることを満足に思ふもの」(吉野作造「斯く信じ斯く語る」へ「文化生活研究會」 五頁 参照 および 川原次吉郎編「古川餘影」 三六頁 参照。)となるが、このようなキリスト教信仰を根底とする肯定的樂天的人生觀が、後年の民本主義の政治理論を生み出す基礎となつたのである。

- (27) 海老沢有道 大内三郎 「日本キリスト教史」(日本基督教団出版局) 三一六頁 参照。
- (28) 鈴木範久 「明治宗教思潮の研究」(東京大学出版会) 二五頁 参照。
- (29) 隅谷三喜男 「近代日本の形成とキリスト教」(新教出版社) 一二五—六頁 参照。
- (30) 海老沢有道 大内三郎 前掲 三三二頁 参照。
- (31) これは金森通倫によって翻訳され、「自由神学」という題で出版されていた。
- (32) 岩井文男「海老名弾正」(日本基督教団出版局) 一三四—五頁 参照。
- (33) 海老名弾正 「再び吾が党の使命を想ふ」 「新人」 明治三五年(一九〇二年) 六月号 参照。
- (34) 土肥昭夫 「海老名弾正——思想と行動——」 和田洋一編 「同志社の思想家たち」(同志社大学生協出版部) 所収 一〇〇頁 参照。
- (35) 明治二年(一八八九年) 二月一日の明治憲法の発布によって、天皇制を頂点とする外見的立憲制が確立し、また翌年一〇月三〇日には教育勅語が出されて、忠孝を根本規範とする臣民倫理や国民教化が強調された。それがやがて内村鑑三事件や「教育と宗教の衝突」論争をひき起こし、また国家主義や国粹主義も盛んとなり、ここにキリスト教の受難時代を迎えることになった。吉駒明子 前掲 三五—六頁 参照。
- (36) 「彼(海老名——筆者注)の熊本での活躍は著しいものであったが、その財布は常に払底がちであった。よき書物を手することは望みなかった。さいわいに当時熊本市内の古本屋には、神道に関する書物が二束三文で売り出されていた。彼はこれらを手に入れることができ、次第次第に、その道の研究を深めることができたのである」。岩井文男 前掲 二一〇頁 参照。
- (37) その詳細については、吉駒明子 前掲 三五—四七頁 参照 および 岩井文男 前掲 一九七—二一〇頁 参照。
- (38) 海老名弾正 「日本国民と基督教」(北文館) 一五二頁 参照。この著書は「国民道德と基督教」の改訂版である。
- (39) 海老名弾正 前掲 四頁 参照。
- (40) 吉駒明子 前掲 三八頁 参照。「海老名は『八百神』が、他の神より『優越』する『至尊至大の神靈』の下にある種の

ヒエラルヒーを成していると見ている。『一神教』というのはそのような『至尊至大の神靈』の存在を指して言われるのであって、八百万の神の『神』性がまったく否定されているのではない。

(41) 吉馴明子 前掲 三九—四〇頁 参照。

(42) 海老名弾正 前掲 八—九頁 参照。

(43) 海老名弾正 前掲 九頁 参照。

(44) 吉馴明子 前掲 四六頁 参照および海老名弾正 前掲 一〇七頁 参照。「神道の如きは吾人之を基督教の一部と見れば足る、何ぞ之を基督教に相對峙せしめて論すべきものならんや」。

(45) 海老名弾正 前掲 九—一〇頁 参照。

(46) 「欧米の文物を輸入することが維新以来の日本の課題であつた。『西洋芸術、東洋道德』という立場の側からのいささかの抵抗があつたものの、キリスト教もまた欧米の文物として輸入さるべきものであつた。このような風潮の下では、キリスト教こそ欧米の政治・社会制度を支える精神であり、日本従来の宗教・思想は『近代国家形成』にはふさわしくないと説くことによって、キリスト教の優秀さを訴え、キリスト教に対する支持を期待することができた」。「ところが、『国粹保存・日本主義』の主張が勃興するようになって、キリスト教は欧米のものだからよいという議論は通じなくなり、キリスト教伝道は逆に守勢に回ることになった。というのは、『国粹保存』論者たちは、『国粹』——『美術的観念』であれ、『帝室に対する国民の感情』であれ、あるいは『仏教』であれ——とは、日本人の中に数千年にわたつて、『道伝』してきたものであつて、容易に変更すべきでないもの、できないもの、であると主張したからである。すなわち、欧米のものだから、輸入すべきではなくて、欧米のものだから、一つ一つ日本人の『道伝』的特性に照し合せて取捨選択されるべきものと考えられるようになった。そこで、『国粹』にかなうキリスト教の形成が、日本社会への伝道の責を負うた海老名の急務となった。日本伝道会社のアメリカン・ボードからの独立という企図は、この目的を果すための制度面での整備と見ることができよう」。

吉馴明子 前掲 三五—六頁 参照。

(47) 鈴木範久 「内村鑑三」(岩波書店) 五一—八頁 参照。「内村鑑三『不敬事件』をかえりみると、それが内村個人の

一生にはかり知れない傷痕を遺したことは、鑑三が、終生天皇およびその関係のことになると、複雑な感情を示すことによってもわかる。「鑑三個人のうえのみならず、本事件は日本近代の歴史からみても、はなはだ大きな意味をもつ事件である。大日本帝国憲法において『神聖侵すべからず』とされた天皇に対して、一個人が現世をこえる普遍的存在を根拠に、その神聖不可侵性を否定する行動をとったのだ。鑑三は、それがために学校を追われることになったとはいえ、人間を絶対視し、不可侵的存在とすることに『否』のありうることを世に示した。この世的な地上のものを、すべて相対化する思想のあることを顯わしたといえる。また、たった一人の人間が、迷いながらもものではあるものの、なによりも良心に忠実な行動に出たことは記憶されるだろう」。鈴木範久 前掲 五七—八頁 参照。なお、この事件の詳細な顛末については、小沢三郎「内村鑑三不敬事件」(新教出版社) 参照。

- (48) この全文については、関臯作編 「井上博士と基督教徒」(哲学書院)(みすず書房リプリント16) 正編 一—八頁 参照。

- (49) この論争の詳細については、関臯作編 前掲 正編 続編 収結編 参照 および 鈴木範久 前掲 九一—一〇頁 参照。

- (50) 吉馴明子 前掲 四八頁 参照。

- (51) 吉馴明子 前掲 四九頁 参照。

- (52) 土肥昭夫 前掲 一〇一頁 参照。

- (53) 「六合雑誌」 明治二十七年(一八九四年)五月発行 一六一号 参照。

- (54) 「六合雑誌」 前掲 参照。

- (55) 土肥昭夫 前掲 一〇二頁 参照。

- (56) 吉馴明子 前掲 五五頁 参照。

- (57) 「内村にとって、日本の戦争目的は、清国が韓国を従属国家としてその開国と近代化を妨げ、韓国の進歩を助ける日本を妨害し侮辱したのに対するプロテストだった。別な面からいえば、清国・韓国・日本が協力して近代化と国民的独立を実現

することにあつて、清国に打撃を与えることでも、韓国を日本に従属させることでもなかつた。そうして日本の戦争目的の法的・道徳的正当性をこれまでに信じえた背景には、維新以降の日本が歩んだ西欧化Ⅱ近代化の路線の正しさと成功に対する信頼があり、さらに西欧文明への信頼があつた。このように、日清戦争を道徳的に正当化するのには、これを文明が野蛮を教化する宗教戦争だとした福沢から植村正久にいたるまで、同時代の知識人にかなり広く共通する傾向だったのである」。

松沢弘陽 「近代日本と内村鑑三」 松沢弘陽責任編集 「内村鑑三」(中央公論社) 日本の名著 38 所収 三八―九頁 参照。またキリスト教徒の日清戦争に対する思想的態度については、山口光朔 「近代日本キリスト教の光と影」(教文館) 八五―九三頁 参照。

(58) 渡瀬常吉 前掲 二一七―二二〇頁 参照。

(59) その概要については、渡瀬常吉 前掲 二二一―二三頁 参照。

(60) 渡瀬常吉 前掲 二三三頁 参照。

(61) その宣言書はつぎの通りである。渡瀬常吉 前掲 二二九頁 参照。

「我儕耶穌基督を救主と尊信し神の召を蒙れる者、大いに時勢を概する処あり、是に南都に会して天父に祈願し、聖靈の恩化に浴し、遂に左の綱領に従ひて福音を宣伝し、神の国を建設せんことを期す。

一、罪惡を悔改し基督により天父に帰順すべき事

一、人は皆神の子なれば互に愛隣の大義を全ふすべき事

一、一夫一婦の倫を保ちて家庭を潔め、父子兄弟の道を盡すべき事

一、国家を振興し、人類の幸福を増進すべき事

一、永生の望は信と義とによりて完うせらるゝ事」

(62) 吉馴明子 前掲 五六頁 参照。

(未完)